

第6回「泉大津市オリアム随筆賞」

【泉大津市長賞】

タオル地の産着

石村和彦・泉大津市

時として真夜中に電話が鳴り響くことがある。大抵は間違いか、非通知設定のワン切りにすぎない。大したことではないとは分かっているが、静寂の中で鳴り響く呼び出し音は眠気を蹴散らすには十分である。そんな時、私はいつもあの夜のことを思い出す。

その呼び出し音は、一回では鳴りやまなかった。時計は二時半を指している。嫌な予感を持ちながら黒電話の受話器を上げると、聞き覚えのない男の声が「あなたの家が燃えていますよ」と告げた。今思えば不思議なことだが、私は瞬時に「あなたの家」が私の実家を指すこと、そしてこの電話がいたずらではないことを察した。自分でも驚くほど敏捷に階下に降り、追いかけてきた妻に「肥子の家が燃えてる」と言い捨てて車に飛び乗った。肥子町は市外だが私が住む泉大津市からさほど離れていない。途中、赤信号にいら立ちながらふと横を見ると、小さな教会前に掲げられた木札に「罪のため世界に平和は来ない」と書かれていた。国道を急ぎ、脇道に折れると見慣れた実家の二階の窓から火柱が吹いていた。私は思わずうめいた。

野次馬をかき分け前に進むと、パジャマ姿の父と出会った。父は簡潔に「お母ちゃんは無事や。うちは火元やない」とだけ言った。ほどなく母とも出会えた。それで少し落ち着いた。

子どもの頃から住み慣れた家の屋根のあちこちが、ポス、ポスと音をたてて崩れていく。その度に夜空に火柱が伸びた。放水の飛沫が、輻射熱に火照った顔にはことさら冷たく感じられた。

父母を家に連れて帰ると、まずは命のあったことをみなで喜び合った。火災保険にも入っていると父は言った。申し合わせたわけではないが、私たちはいいことばかりを話していた。今から20年ほど前、まだ携帯電話が今ほど普及していなかった頃で、父は携帯を持っていた野次馬に頼んで私に電話をかけさせたのだった。高かったカメラを置いてきてしまったのは惜しいが、車を逃がしたのは正解だったと父は自慢げに言った。母は胸のあたりをまさぐり、「私が持って逃げたのはこれだけ」と言いながら、何か汚れたタオルのようなものを大切そうに出した。見るとそれは、私が赤ん坊の時に使っていたという、白い、といっても今では黄色く変色した、私の産着だった。子どもの頃、何度か母に見せられたことがある。泉州タオルで手作りされた小さな産着は、見るからに柔らかそうであった。母が持って逃げたのはこれだけだった。「これは、私が死んだら、一緒に燃やしてほしいから」と母は言った。

家はほどなく建て直すことができたが、それから7年後に父は逝った。母はそこに一人で

暮らしていたが、数年後、近所の人から物騒な相談が入った。母が朝の5時頃に近所の家々に行き、いつまで寝ているのだと起こしてまわったという。認知症ではないか、というのである。受診させると、医師は迷わず診断を下した。

それから母は急速に母らしさを失っていった。いろいろな記憶を失い、あんなに好きだった孫のことも、父のことさえも、今はよく分かっていない様子である。ある日、施設に見舞いに行くと、布団の裾に茶色のシミがあった。もしかして排泄物ではないかと疑って眺めていると、母はそれを隠そうとしたのか、指を4本舐めて唾で濡らし、シミを指でこするとまたそれを舐めようとした。私は手で制し、鼻をシミに近づけた。はたして糞の臭いがした。それから私の足は少し母から遠のいた。忙しさもあったし、母らしくない母に会いたくないという気持ちもあった。

立て直した実家は借家にして、施設の費用に充てることにした。仲介業者には、家を空っぽにするよう指示された。

実家に片付けに向かう途中、赤信号にいら立ちながらふと横を見ると、木札に「罪のため世界に平和は来ない」と書かれていた。私は「あっ」と声を上げ、産着のことを思い出した。その日から、実家の片付けの目的は産着探しになった。しかし、家を空っぽにしても、産着は出てこなかった。おそらく母がゴミとして捨てたのだろう。そう思うと、悔しくて仕方がなかった。

よほどしよげていたのだろう、私が帰ると妻が理由を尋ねてきた。事情を話すと、妻はいたずらっぽく微笑み、奥からタオル地の産着を出してきた。老いを自覚した母が、自分は捨ててしまうかもしれないから今のうちにと、妻に託していたのだった。「私が死んだら一緒に燃やしてほしいから」という願いを添えて。

だから、もし母にその時が来たら、私はタオル地の産着を二つに裁とうと思っている。一つは母とともに、残りは私の時のために。